

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 川口孤舟 久米五郎太 在間千恵 佐藤ただしげ 豊田ゆたか

長谷見びん 星田啓子 山崎亜也

投句・選句 伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 中川雅夫

福島正明 古田昇 宮内規雄 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 赤田堅 安部眞希子 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章

山本三恵

《互選句》○は選者の特選 ◎は孤舟選者の選

九点 ◎主の無き寂庵の庭木の葉散る けい子 (紀・孤・千・た・敏・ゆ・雅・規・盛)

八点 新蕎麦や命ある身を噛みしめつ ゆたか (堅・眞・紀・そ・忠・五・孝・敏)

七点 ◎埒もなきこと反芻し枯葉掃く そらお (紀・○孤・恵・堂・啓・雅・天)

時雨るや嘗て名画座ありし角 恵洲 (眞・紀・○忠・健・敏・允・○啓)

起重機を寝かせ曳船霧のなか びん (紀・健・恵・堂・啓・亜・け)

六点 冬蝶の路傍の石に翅畳む 恵洲 (紀・そ・孤・五・び・啓・規)

落ち栗や一族遠き町に住む びん (眞・恵・正・亜・け・三)

びいどろの実を蓄えて柘榴熟る 啓子 (紀・千・た・孝・び・け)

五点 小三治逝き冥土の冬寄席大入りに 紀久男 (○敏・び・雅・允・け)

鳴く鹿の闇に消えゆく南大門 五郎太 (紀・○堂・敏・規・盛)

◎赤かばちや添えて幼き感謝祭 びん (紀・孤・五・ゆ・三)

◎一輪の物言ひたげな返り花 昇 (紀・孤・規・三・盛)

暮れの秋霞が浦の帆掛け漁 啓子 (紀・堅・健・た・允)

もみじ葉を踏めば謡ひし父の声 全 (紀・堅・た・正・○三)

振袖をまくり射的を七五三 けい子 (紀・び・隆・亜・盛)

◎缺けしこと忘れたるごと冬の月 亜也 (紀・堅・孤・龍・雅)

◎酒好きの父しのぶ夜の掘炬燵 盛雄 (○紀・孤・○そ・敏・び)

四点 ためらはず半寿の十年日記買ふ 孤舟 (紀・健・孝・○盛)

冬夕焼けエンドロールのまだ続く 全 (○恵・正・亜・三)

松島屋の挑戦

顔見世や連獅子舞うは祖父と孫 ただしげ (紀・敏・隆・け)

◎力込め乾布摩擦や今朝の冬 堂哉 (孤・健・恵・天)

人生の酸いも甘いも木の葉髪 昇 (紀・そ・敏・允)

妻の死はまだ夢の中秋海棠 規雄 (紀・堂・允・け)

絶品や牡蠣三昧の志摩の宿 紀久男 (忠・千・龍)  
 仏壇の写真に微笑み秋の暮 忠彦 (紀・〇堅・隆)  
 文例も唐に学びし小春かな 五郎太 (紀・堅・龍)  
 散もみじ金剛峯寺の修行僧 健介 (紀・た・天)  
 長き夜や読み始めたりメルケル記 千恵 (紀・〇正・雅)  
 ゆつたりと潮の流れや瀬戸の秋 千恵 (紀・そ・敏)  
 ◎股引きを買い足して済む冬支度 千恵 (紀・〇正・雅)  
 「有難うまた来年」と寒肥やし 堂哉 (〇眞・紀・び)  
 鐘の音の秋空わたる深大寺 恵洲 (紀・孤・堂)  
 「黄桜」の美人絵うるむぬくめ酒 堂哉 (〇眞・紀・び)  
 ◎山茶花の夜目にも白き咲きつぷり びん (紀・昇・亜)  
 ポインセチア香港の事考える 啓子 (紀・孤・昇)  
 ああ冷た外の手摺に朝ふれて 正明 (紀・千・隆)  
 票を入れ団栗一つ拾ひけり 天牛 (紀・千・啓)  
 龍の玉集むもいつか失せにけり 全 (紀・恵・亜)  
 牡蠣鍋やおひとりさまもまた大事 全 (紀・五・龍)  
 里は市に旧道に添ふ帰り花 盛雄 (紀・忠・天)  
 蛸焼き食ぶ外つ国の人冬うらら 全 (紀・正・天)

新蕎麦もつゆの味こそ決め手にて そらお (紀・龍)  
 雀等のほつくり姿冬支度 忠彦 (紀・孝)  
 若君よいざ初陣の七五三 孤舟 (紀・堂)  
 穴にいる蛇ぶら下げて餓鬼大将 全 (紀・〇五)  
 短日や窓開けて鳴く鳩時計 全 (啓・盛)  
 八冠もクールに翔平爽やかに 千恵 (紀・〇昇)

十一月八日 金星蝕

三日月と明星出会う冬の空 全 (健・龍)  
 夕闇に富士の山影秋去りぬ 全 (紀・ゆ)  
 問われれば間髪入れず寄せ鍋と 堂哉 (千・天)  
 柿三連軒下に干して里俣ぶ ゆたか (紀・孝)  
 菊の香や異国で生活する勇氣 正明 (紀・忠)  
 落ち葉焚き子供が集う天神社 全 (紀・ゆ)  
 竹林の庵の軒借る初しぐれ 昇 (紀・ゆ)  
 酒抱きて小庭に満月語り合い 雅夫 (紀・ゆ)  
 小鳥鳴く障子の影や心地よき 全 (紀・規)  
 芋の葉に雫煌るや夜の名残り 啓子 (紀・昇)  
 ラガー等の肩組み唱う校歌かな 規雄 (眞・隆)  
 日向ぼこりぷちんぷちんと爪を切り 全 (紀・昇)  
 ◎山茶花の散り敷く樹下やくれなみに 亜也 (孤・雅)  
 木枯を子ら自転車でつつ走る 天牛 (紀・そ)  
 ◎風を切り鋭くならむ寒鴉 けい子 (紀・孤)

一点

三津五郎七回忌追善 巳之助

顔見世に天晴れ若武者名乗り上ぐ

紀久男

(允)

三津五郎七回忌の巳之助

顔見世の主役大出来喝采浴ぶ

全

(啓)

黄金色染まる银杏の深き秋

忠彦

(紀)

今熊野

紅葉散る静かに願ふボケ封じ

五郎太

(紀)

萩黄葉その先にある招提寺

全

(紀)

サッカーと野球の部活へ横時雨

健介

(紀)

連獅子を観て

仔獅子舞ふ若手役者の爽やかさ

千恵

(紀)

草刈りてポツンと残る彼岸花

ただしげ

(孝)

植物園にて

深大寺鳥の声きく紅葉晴

ゆたか

(紀)

いなり鮎食みつ床机で紅葉愛づ

全

(紀)

香里丘降り来る寒さ兵懐(おも)う

雅夫

(紀)

姥捨や猪傷む今朝の畏

びん

(紀)

白菜の芯と葉好み分かれけり

亜也

(正)

左翼越しのヒット打つ孫勤労感謝の日

天牛

(紀)

木枯や犬の洋服ケ・セラ・セラ

盛雄

(紀)

※ ※ ※ ※ ※

【句評】

九点句

主の無き寂庵の庭木の葉散る

けい子

孤舟さん・・・瀬戸内寂庵が偉大な生涯を閉じた。

千恵さん・・・九十九歳で逝った寂庵さんの波乱の人生を想い、主不在の庭は一層寂

しい風景になつていける様が伝わりました。

ただしげさん・・・寂庵さん亡き後の寂しさがよく伝わってくる。

盛雄さん・・・二月27日の日経俳壇 黒田杏子選に寂庵さん追悼の佳作十一句が掲

載されました。この作品は青葉会としての代表句です。

八点句

新蕎麦や命ある身を噛みしめつ

ゆたか

堅さん・・・私も蕎麦は常時打っています。

敏郎さん・・・佳作です。果してあと何回、こうした機会にありつけることやら？

我が事です。

七点句

埒もなきこと反芻し枯葉掃く

そらお

孤舟さん・・・たわいないことが心に引っかけかり、枯葉を掃く間も気持ち晴れない。

恵洲さん・・・老人の日常的一幕。落葉を掃きながら、よしなしごとをぼーっと考え

るともなく考えて居る。わかるなあ。

堂哉さん・・・上五と枯れ葉がピッタリと感じました。

雅夫さん・・・私の庭掃除も同じです。

時雨や嘗て名画座ありし角 惠洲

忠彦さん・・・昔どの町にも映画館があり旅先でも利用したものです。それもなぜか角地が多いですね。

啓子さん・・・間違はなく90年は超えていた東京は三軒茶屋の名画座が昨年遂に閉館。小学校の課外授業にそこで「山」という映画を観て幼い乍ら感動しました。時雨の季語と下五の措辞で、その前に佇み昔を思い返す人やセピア色になつた当時の写真を見るようでもあります。

起重機を寝かせ曳船霧のなか びん

惠洲さん・・・霧の中に浮かぶ起重機の曳舟の写生。いい絵です。

堂哉さん・・・長い工事がやつと終了。聳えていた重機もお疲れさまと、畳み現場を静かに見送る人もなく去る船。

啓子さん・・・ひとつの作業が漸く終わり、キリンもアタマをさげて船にひかれている。起重機や曳き船といった言葉は硬い鉄の匂いがするものだが、ここではほっとしたような、なにやらけだるい雰囲気までも醸し出して静か。亜也さん・・・川瀬巴水の版画にありそうな情景。

六点句 冬蝶の路傍の石に翅畳む

惠洲

五郎太さん・・・短き日の暖かさを残す大きめの石に、弱く飛ぶ蝶がゆつくりと休む。

静謐の中の動きに美を感じた。

紀久男・・・「萬緑」の多摩川吟行で似たような句を作ったことがあります。先日の日経新聞に奄美諸島で木にとまって越冬する色とりどりの大きめの蝶の群を紹介しておりました。

落ち栗や一族遠き町に住む

びん

忠彦さん・・・大きなお宅なのでしようか。栗の木残っているのが寂しい。

惠洲さん・・・犀星の「故郷は遠きにありて思ふもの・・・」の詩を思い出させます。落ち栗から遠くに住む一族に思いが及ぶところに共感。

びいどろの実を蓄えて柘榴熟る

啓子

千恵さん・・・好きな果物の一つです(面倒くさい果物ですが)柘榴の実を“びいどろ”と表現してところが素敵だと思いました。

ただしげさん・・・柘榴の実の赤をびいどろとの表現がよい。

五点句 小三治逝き冥土の冬寄席大入りに 紀久男

敏郎さん・・・発想の面白さに感服!!

紀久男(自解)・・・TVで偲ぶ番組拝見。私より重いリウマチで処方薬ないと身体全体が動かないと知りました。先代小さんの一番弟子でしたが、跡目を小さんの実子に譲った謙虚な人柄。「人間国宝」なのにひけらかしたこともありません。私の、りえぞん企画時代、丸紅グループのナナハシ・ドライバーを集めて座談会をやったことがあります。その折の拙句が「革ジャンパーにバイク乗りつけ一席を」

鳴く鹿の闇に消えゆく南大門

五郎太

堂哉さん・・・暮れゆく門と両サイドの提灯、そして鹿の白いお尻が目には浮かびます。

大好きな景色の一つです。

敏郎さん・・・佳作です。一度体験してみたい幻想的な情景です。

赤かぼちゃ添えて幼き感謝祭

びん

孤舟さん・・・何故七面鳥や南瓜が感謝祭の料理の定番になったかも知らずに、只々かぼちゃを添えている。可愛い。

一輪の物言ひたげな返り花

昇

孤舟さん・・・何故こんなに季節外れに咲いたのか聞いてみたい。

暮れの秋霞ケ浦の帆掛け漁

啓子

ただしげさん・・・霞ケ浦の帆掛け船による漁が美しく詠まれている。

もみぢ葉を踏めば謡ひし父の声

啓子

堅さん・・・コロナ禍ですが謡だけは続いています。私の場合は母の声ですが・・・ただしげさん・・・落ち葉の踏む音が鳴り物、合いの手、拍子のように感じられ、それに合わせて謡を稽古する様子が感じられる。

振袖をまくり射的を七五三

けい子

隆さん・・・七五三の御祝いの光景は平和でいい。「を」の重なりを避けて「振袖をからげ射的の七五三」も。

亜也さん・・・着飾りながらのお転婆を巧みに表現。

盛雄さん・・・呉服の都、京都でも七五三はレンタルが増えている様子。女兒の和服姿は可愛いものです。

紀久男・・・戦時中の映画、大河内伝次郎の丹下左膳の射的屋の用心棒を思い出しました。

抜けしこと忘れたるごと冬の月

亜也

孤舟さん・・・先日の月蝕は短時間の間に、月の光る面が一部または全部欠けていった。

酒好きの父しのぶ夜の掘炬燵

盛雄

孤舟さん・・・掘炬燵にあたりながら熱燗の独酌を楽しむ父だった。

そらおさん・・・今は我が家に炬燵はないが、その昔、勤めから帰宅して炬燵で晩酌するのが日々の楽しみであった亡き父の姿を思い出した。

紀久男・・・陽気な酒呑みの家系で、私は小学生の頃から晩酌（徳利一本）して、母からは「外で飲んだらアカンぞ」と言われていました。

## 四点句

ためらはず半寿の十年日記買ふ

孤舟

健介さん・・・この勇氣と決断、自分に一番欠けているものです、脱帽！

孝岳さん・・・数え八十一歳の身で十年日記を買う意気や盛ん。それもためらわずとは。同年輩の吾身に大変な勇氣を貰いました。

盛雄さん・・・百歳を見越して新しく十年日記を買ふ。愉しく、そして立派な心意気に喝采。「ためらはず」がいいですね。

冬夕焼けエンドロールのまだ続く

孤舟

恵洲さん・・・幻想的で不思議な句。いつまでも色褪せない冬夕焼けにいつまでも終わらない映画のエンドロールが延々と続く幻想か。買いきかもしれないが、夕焼けにエンドロールを重ねる感性を買う。

正明さん・・・佳作です。いつまでも続いて欲しい真っ赤な冬夕焼けですね。

顔見世や連獅子舞うは祖父と孫 だしげ

隆さん……片岡仁左衛門喜寿の連獅子。仁左衛門は35年間の願いがかなったとか。新型コロナも下火で喜びも一入。

紀久男……仁左衛門の長男は女形。孫の千之助は二枚目。連獅子は親子で舞うのが通例です。

力込め乾布摩擦や今朝の冬 堂哉

孤舟さん……昔は、寒風摩擦が体力向上、風邪予防等のための唯一の民間の健康法であった。

恵洲さん……寒さに負けない老いの心意気を買います。(作者を知って居ての投句) 妻の死はまだ夢の中秋海棠 規雄

堂哉さん……夢であって欲しいですね！中七に痺れました。  
けい子さん……すなおに妻の死を悲しいと思う気持。夫人の生存中もやさしい声かけていましたか？

### 三点句

絶品や牡蠣三味の志摩の宿 紀久男

忠彦さん……羨ましい、酒もすすむでしょう。  
龍平さん……同感でございます。

紀久男(自解)……津在任の平松君(旧姓古市 審査部六年だけで退社。囲碁部の部長・水泳部で私と一緒に)の招待でした。大峰山登り口の汽水湖。

仏壇の写真に微笑み秋の暮 忠彦

堅さん……六月に妻に先立たれ、実感です。  
隆さん……亡き人と心を通わす時の有難さ。私は毎朝。

「仏壇の写真と交わす今朝の秋」。

文例も唐に学びし小春かな 五郎太

五郎太さん(自解)……光明皇后は唐の手本を写すように何メートルにも及ぶ手紙の例文集を漢字で書いた。今年の正倉院展の目玉の一つである『杜家立成』である。学んだのは漢字だけでなく、日常の文章、模範文である。

光明皇后とでも題をつけるべきだったか。

散もみじ金剛峰寺の修行僧 健介

ただしげさん……秋の静かな様子が修行僧という言葉で、より一層感じられる。

長き夜や読み始めたりメルケル記 千恵

正明さん……「田」がどうなるのか心配です。

股引きを買い足して済む冬支度 恵洲

孤舟さん……この歳になると欲しいものは何も無い。破れた股引を買い替えるだけで冬を迎えられそうだ。

堂哉さん……最近は無ニコロに安くて暖かいのがあるようです。

「有難うまた来年」と寒肥やし 堂哉

眞希子さん……コロナ禍にあつて、植物の命のあり方に心打たれることが多い。酷暑や強風にも黙って耐える。それに比べ私になんと意気地なき呟きの多いことか！そんな俄園芸者にゆたかな実りをくれた緑の仲間。感謝あるのみである。

鐘の音の秋空わたる深大寺

ゆたか

隆さん……澄んだ秋の空を鐘の音も遠くの屋根まで届く。切れ字を入れて「鐘の音や秋空わたる深大寺」でも。ただしげさん……澄んだ秋の空に、深大寺の鐘の音の澄んだ音が聞こえてきそうな感じがする。

「黄桜」の美人絵うるむぬくめ酒

びん

亜也さん……河童は清水崑がいいと思います。

紀久男……昭和39年と今年の東京五輪で水球のスポンサーは「黄桜」で大阪水泳部と商取引先の「川島織物」の関連で辛口晩酌しております。

山茶花の夜目にも白き咲きつぷり

啓子

孤舟さん……この山茶花は白の花、だから夜も見えるのである。

ポインセチア香港の事考える

正明

千恵さん……2度ほど年末から年始にかけて香港を訪れました。ホテル内はもちろん街中ポインセチアにあふれ活気のある街でしたが、いまの状況を考えると心が痛みます。

隆さん……クリスマス。ポインセチアが香港人を称える。

票を入れ団栗一つ拾ひけり

天牛

恵洲さん……選挙の帰り道、ふと童心に帰って落ちていたドングリを一つ拾った。選者もドングリを見るとつい拾いたくなるので、同感の一票。

## 二点句

新蕎麦もつゆの味こそ決め手にて

そらお

龍平さん……同感でございます。

若君よいざ初陣の七五三

孤舟

堂哉さん……おじいさんの笑みが浮かんできます。我が家ではもう昔話になりました。

紀久男……上五中七の措辞が見事に決まっています。

穴にいる蛇ぶら下げて餓鬼大将

孤舟

五郎太さん……蛇に関する句をよくいただく。自分が田舎で少年時代を過ごさなかったこともある。この句は動きがあり、餓鬼大将が良い。天にいただきました。

紀久男……通学途中の子どもが仲間と蛇をいじめることはよくありますが、穴に居る蛇を引っ張り出して痛めつけるのは見たことがありません。気の毒な蛇ですね。

八冠もクールに翔平爽やかに

千恵

昇さん……大谷翔平の大リーグでの投打二刀流の超人的な大活躍。かのイチローも真っ青ですね。特に、ホームラン王を狙える日本人選手が出てくるとは奇跡です。礼儀正しい爽やかな言動も素晴らしい。今年の流行語はもう「ショータイム」で決まり！

十二月八日 金星蝕

三日月と明星出会う冬の空

ただしげ

健介さん……みな気付かないこの稀有な現象を良く捉え、詠まれました。龍平さん……冬になりますと特に星座の動きに果てし無い麗しのロマンを感じま

す。トシを取ると湧き出る良い事の一つか。

小鳥鳴く障子の影や心地よき

雅夫

紀久男・・・鶯のささ鳴きでしようか。或いは渡り鳥か冬鳥でしようか。雪の降り積もった朝は特にぎわいます。障子に映る鳥の影を眺める心地よき、布団から出られぬ天国です。

ラガー等の肩組み唱う校歌かな

規雄

隆さん・・・校歌で勝利を祝う。応援席からも校歌が聞こえる。季語を入れて「ラガーマン校歌の響く秋の空」。

山茶花の散り敷く樹下やくれなるに

亜也

孤舟さん・・・山茶花は小振りで花卉がうすく、一片ずつ散り易い。

風を切り鋭くならむ寒鴉

けい子

孤舟さん・・・食物の乏しい冬には、鴉は電線などにとまり、鋭く餌になるものを狙う。

## 一点句

三津五郎七回忌追善 巳之助

顔見世に天晴れ若武者名乗り上ぐ

紀久男

紀久男(自解)・・・「曾我の対面」は顔見世狂言として人気あります。菊五郎の座頭(ざがしら)時蔵、雀右衛門、左團次、松緑ら適役揃いで見応えありました。今回は三津五郎追善で巳之助が瞳目の出来、啓子さん、千恵さん、ただしげさんと最高の席で見物、久しぶりに贅沢な気分になりました。なお、二等席で開成高校一年生の貸切、流石と感じ入りました。

今熊野

紅葉散る静かに願ふボケ封じ

五郎太

紀久男・・・京の神社かお寺のようですが、蒲郡にも有名な呆け封じ・癌防止のツアーあり繊維資材部のOB会で行ったことがあります。

香里丘降り来る寒さ兵懐(おも)う

雅夫

雅夫さん(自解)・・・太古は古代住居跡。第二次大戦は兵器工場でした(枚方市)

姥捨や猪傷む今朝の畏

びん

紀久男・・・信州のようですが、宝塚の裏山や芦屋川にも猪はよく出没。当時は人への危害など聞いたこともなく、地元の人に愛されていたと思います。禁猟が解かれるとこの句にあるような気の毒な目に逢うのでしょうか。

~~~~~

## 次回青葉会

令和三年十二月十六日(木)

十二時～十四時 於：大手町 赤坂飯店パレスサイドビル店

参加会費 二千五百円～三千円(昼食・ビール等)

◇参加者は当季雑詠3句。投句は2句まで。締め切り：十二月十四日(火)中にしました。参加の可否、ご投句のご連絡は：今井宛 FAX か郵送、或いは星田メール

([keiko-reve@c07.itscom.net](mailto:keiko-reve@c07.itscom.net)) までお願い致します。



一、現役社員や近隣の勤め人に人気の赤坂飯店パレスサイド店の個室がギリギリの9名出席。投句12名の作品が集まり、五郎太さんの披露でご覧のように、けい子さん、そらおさん、ゆたかさん等が好成績でした。眞希子さんの選句FAX、天牛さんの投句FAXを回覧しつつ、美味しい中華料理とビール、紹興酒を堪能しつつ通例よりも30分ほど時間短縮して(師走近い為、店からの要望)、句評を二人に限定し進行しました。一寸忙しい感でしたが致し方ありません。

二、関係者近詠

|                  |     |                    |     |
|------------------|-----|--------------------|-----|
| 変異株猛れど新米契約す      | 眞希子 | さらばひし妻に握らす木の実独楽    | 陽亮  |
| 茱萸たわわ陽気暮らしをと認知棟  | 全   | 金木犀妻の分もと深く吸ふ       | 全   |
| 平熱に入店の許可秋暑し      | 全   | 頭脳(あたま)良き友も今朝逝き吾亦紅 | 全   |
| 内輪の葬済みしとハガキ吾亦紅   | 全   | 来てほしくない事ばかり来る秋ぞ    | 全   |
| 沖に並む船舶台風接近中      | 全   | 新内仲三郎・多賀大夫の会       |     |
| うつすらと紅刷く林檎津軽富士   | 弘子  | 久々に掛声決める秋天下        | 紀久男 |
| 漉紙を紙縫に綴り白き秋      | 全   | 仁左衛門・玉三郎の「四谷怪談」    |     |
| 爽涼や仕事鞆の今朝軽き      | 全   | 冷まじき殺し場はしよる芝居小屋    | 全   |
| 細き身をさながら詫ぶる秋刀魚かな | 全   | 幕間に栗大福を連れと食ふ       | 全   |
|                  |     | きちきちの不器用に飛ぶ散歩道     | 全   |

「森の座」(横澤放川選) 12月号

|                 |    |                 |     |
|-----------------|----|-----------------|-----|
| 痛む足忘る小春日遊歩道     | 盛雄 | 小夜時雨通天閣の緑の灯     | 健介  |
| 鬱の日を救ふ出窓のポインセチア | 全  | 長き夜や嵌る芙美子の放浪記   | 全   |
| ちぎれ雲三つ四つ放ち山眠る   | 全  | 時雨るるや天麩羅蕎麦に一本つけ | 紀久男 |
| 知恩院の女坂ゆく初しぐれ    | 全  | 解き放つ快癒の白鳥上空へ    | 全   |
|                 |    | 大谷の来季待たるる師走かな   | 全   |

「きさらぎ句会」 11月

三、孤舟選者近詠

|                       |                             |
|-----------------------|-----------------------------|
| ―角川書店 月刊「俳句」12月号「望郷」― | 「丘の風」三田俳句丘の会 No.31 11月「浮世絵」 |
| 望郷のエンドロールの桐一葉         | 公魚のひかりとなりて釣られけり             |
| 水の秋河童は皿を洗ひをり          | どの子にも凧の空あり未来あり              |
| 生意気な臀をしてゐる水蜜桃         | 船虫の何やら謀議して散りぬ               |
| 月影の木犀は香を争はず           | 夏の蝶形状記憶の翅畳む                 |
| 秋爽の波たふたふとたらひ舟         | 飯盒の炊けてキャンプの朝動く              |
| 嶺の鷹確と虚空を睥睨す           | 舟屋口洗ふ波音星月夜                  |
| 沼底を見てきた貌のかいつぶり        | 秋天へレースの鳩の放たるる               |
| 軒氷柱満天の星閉ぢ込めて          | 夜這星ひとつ走りて漁火に                |
|                       | 浮世絵のをんなも濡るる時雨かな             |
|                       | この星に生くるひとりや冬銀河              |

四、I. 小三治を偲ぶ 「孤高の落語家」NHKテレビ10月31日より

「曲がらずに曲がらずに往く神の旅」矢野誠一の選

## II. 小三治（俳号 土砂）自薦30句より、小生好みを抄出してみました。

立春や嘶家やつとお正月

ほどの良い形にひとつ秋の雲

銭湯を出て肩車冬の月

打水の女逞し植痘痕

寒雷やちつとも効かぬ強精剤

おもひあつたことのあるひとと海雲吸ふ

## III. 小三治の訃報を日経紙（二月二日）にカラー刷りの顔写真に簡潔な履歴と看板コラム

「春秋」、そして社会面にも詳しく掲載。二月20日の「追想録」まで各方面の人達の追悼記事が続いております。

## 五、二月4日の日経俳壇「黒田杏子選」の巻頭句と次巻頭は、被爆者団体代表の坪井直さんの追

悼句です。10月29日の日経コラム「春秋」に「オバマ逢ふ被爆少年首夏の空」 五年前、同俳壇に載った広島市の方の句である―と紹介している。被爆時に坪井さんは20歳。広島大学の学生でした。丸紅の一年後輩、田部修司さんは当時5歳、被爆者手帳所持者です。私の大阪時代出張で彼の実家（比治山の麓）に泊めて貰ったことがあり、玄関に近いその部屋は母上が被爆死された部屋だったそうです。天牛さんによると、彼は繊維から機械部門に移り青葉会の小池治さんの部下だった由。三菱商事田部文一郎会長は伯父の由。泊めて貰った翌朝食に姉上から「お茶代わり」に熱い茶碗酒（地酒 保万齢（ほまれ））をいただきました。すこぶる旨かった憶えあります。

六、NHK大河ドラマ「青天を衝け」は道徳・経済の合一（論語と算盤）を提唱した渋沢栄一の生涯を描いて大詰めです。彼の設立した高校（深谷商業高校）、一橋大学の両方を卒業したのが丸紅入社昭和5年の中村信一君です。大阪の繊維資材で、水泳部も一緒しました。会社帰りに扇町プールで（雷と夕立で監視員不在）二人だけで泳いだことあり、その後ミナミで痛飲したこと云うまでもありません。なお彼はなかなか商才あり、部門が独立して別会社になり（丸紅インテックス）社長を経験しております。二月29日NHKの「鶴瓶の家族に乾杯」は彼の生誕地埼玉県行田市（足袋の町で有名です）でした。

令和三年十一月十八日

紀久男 記